

江戸期における市街地と橋梁との変遷

信州大学工学部	○福市 健一郎
信州大学大学院 学生員	前田 直志
信州大学大学院 学生員	山本 太郎
信州大学工学部 正 員	清水 茂

1. はじめに

ある場所に橋梁を架設すると、その周囲の各集落間の往来が従来より容易となる。このことによって生じる人及び物資などの流れの変化は影響を受ける。その他にも橋梁の新設が地域へ与える影響は大きい。これらのことを考慮するためにも、橋梁を設置する際には周辺地域の状況をよく知る必要がある。架設時点における状況はもちろんのことであるが、この架橋により地域がいかなる影響を受け、いかなるように変化していくのかをも十分に把握する必要がある。本研究は、江戸時代の市街地の発展と橋梁との関係を取り上げ、橋梁の架設が地域に与える影響を時代を追って考察していく。

2. 研究の手段

橋梁とその周辺地域とのようすを調べるにあたり、史料、古地図、浮世絵等を資料として用いる。

また材料均一の場合の式
一部としてこれらを体系的に納め、先に作成された江戸府内の橋梁に関するデータベース¹⁾を用いる。このデータベースを使用することにより時代を追って橋梁の架設地域の広がりや、周囲の状況などを知ることができる。

古地図は寛永年間のものから享保年間のものまで4種類を使用した。これらは視覚的に市街地の広がりを容易に把握することができ、たいへん有効なものである。

3. 時代区分

本研究では、その過程において江戸時代前期を以下の4つの時代区に分類した。

①徳川家康入国以前

②家康入国以降から明暦の大火まで

③明暦の大火から元禄年間まで

④宝永以降

このように区分けしたのは以下の理由による。①は、家康入国後に市街地開発が活性化したため、それ以前のようにすを観察しておく必要があると考えられるため。②は、自然発生的な拡大期と考えられるこの時期と、明暦の大火後の本格的な拡大期とを分ける必要があると考えられるため。③は、明暦の大火をきっかけとして市街地が急激に広がる重要な時期と考えられるため。④は、市街地の拡大化に落ち着きが見え始めたころであると考えられるため。本論文では、③と④について比較・検討をする。

4. 家康入国後～明暦の大火(1590～1657)

江戸の街は交通手段として、水路が良く整備されている。これは、家康入国当初の江戸城改修と関係があり、必要な建設資材を海から搬入していたためである。呉服橋周辺で堀と城とにはさまれた場所が、古くから繁栄していた地域で、埋立地域の拡大とともにそれが海側へ展開していった。江戸城の海側の地域はもともとは入江で、慶長年間までには埋め立てられたと言われている。慶長8年に日本橋・京橋・新橋などが架設されている。寛永と明暦との橋梁数を古地図上で比較してみると、江戸市中に架かるものにはあまり変化はなく、海側で若干の違いが見られる。これは、埋立地の拡大に伴うものであると考えられる。神田川以北地域は、寛永期から明暦の大火までの間に急激に発展している。この2つの時期における神田川に架かる橋梁数には変化が認められないので、これらの橋梁群は市街地拡大のために設けられたと考えられる。東側では、本所地区は大部分が湿地帯であったため、わずかな高台の地と、水戸佐倉街

道の馬継ぎ場所とがわずかに開発されていたと思われる。深川地区は、塩の搬入路である小名木川沿いがわずかに開発されていたようである。寛永年間には、深川佐賀町上ノ橋・中ノ橋・下ノ橋等があり居住区の広がりを示していると考えられる。

5. 明暦の大火～元禄年間(1657～1704)

明暦の大火とは、明暦3年1月に起こった火事のこと、これにより江戸の東側から南側にかけで半分以上が焼け野原となってしまったといわれている。この大火により幕府は本格的な防火対策をとった。以下にその防火対策をいくつか挙げる。

○寺院を深川・浅草方面に移転させる。

○江戸城内にあった大名・旗本の屋敷を郊外に移転させる。

○火除地として広小路を設置する。

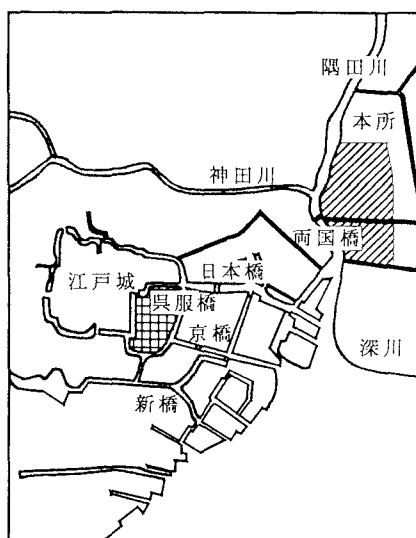
○主要道路を拡幅する。

これらのことによって、江戸城下の土地が不足し、立ち退きを命じられたものが現れた。彼らの新しい生活の場として隅田川以東地域が選ばれ、本格的に本所・深川の開発が進められるようになったと考えられる。水はけの悪い本所地区の排水路として竪川、生活用水として亀有上水、またその他の堀が次々と開削され、それに伴いいくつかの橋が架設された。そして、隅田川河口部に両国橋が初めて架設された。立ち退きの町家の代地が一斉に本所で支給され、ついに江戸の市街地として隅田川以東地域が注目され始めた。隅田川以東の市街地は、竪川を中心に南北に延びていきにぎわいをみせた。しかしながら、天和年間に本所地区の開発中止が水害の多さから決定された。これにより修理中の両国橋が仮橋のまま放置されたことは、この橋が市街地開発と密接に関係していたことを表している。元禄年間に再び本所地区の開発が始まると、隅田川以東の繁栄により6年に新大橋、11年に永代橋が架設された。

6. 考察

江戸市中において、橋梁は重要な施設であったことに間違いはない。水路を頻繁に使用していた江戸で、橋梁の発達はそのま街の発達につながることが考えられる。ただ自然災害が多かったこ

とと技術的に未熟であったことが考えられ、修理などに掛かる費用は莫大であり、橋梁の維持と利益との兼ね合いとを考えると難しかったのではないと思われる。特に大河川に架かる橋は、河口付近の開発により洪水が起きやすくなっている状況下で、その維持費は膨大であったに違いない。そのために、両国橋が創架された後、新大橋が架設されるまでに約32年間もの年月がかかってしまったものと思われる。川を渡る手段としては、橋の他には渡し船がある。しかしながら、これは雨や強風の日などは渡ることができない上に、一度の輸送量も少ないため、経済循環の減退につながる。よって、都市機能を持ち始めた江戸においては、橋梁の架設がその十分な発展を成すかどうかの鍵であったと考えられる。



元禄年間の江戸略図

【参考文献】

- 1) 山本・清水：江戸府内の橋梁に関するデータベースの作成、土木史研究第15号、pp553、1995
- 2) 東京市役所：東京市史稿 橋梁編、1936
- 3) 水江 蓮子：江戸市中形成史の研究、1977
- 4) 『東京人』編集室：江戸・東京を造った人々 都市のプランナーたち
- 5) 桜井 正信：歴史散策東京江戸案内 5 年中行事と地名篇、1994
- 6) 隅田区史・江東区史
- 7) 古地図各種